
明と暗の物語～失恋短編集～

柊和海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明と暗の物語〜失恋短編集〜

【Nコード】

N0337Z

【作者名】

柊和海

【あらすじ】

私が笑う陰で、泣く者が居るかも知れない。

貴方が笑う陰で、喪失感に苛まれる者が居るかも知れない。

それは良でもなければ否でもない、当たり前の日常。

こんな世界の中で、泣く者に焦点を当てた脆く儂くも、穏やかで温かい物語。

ブローグを始めに

笑う者が居れば、泣く者が居る。

無意識に幸せを与えることがあれば、無意識に不幸を与えることもある。

全てが表裏一体の世界。

例えば、同じクラスの隣の席の女の子。

彼女には彼氏が居るかも知れない、しかし彼女に好意を寄せている男の子も居るかも知れない。

例えば、披露宴で微笑む新郎。

隣には同じく幸せそうに微笑む新婦が居ながら、同席している幼馴染みは昔から彼を想って居たのかも知れない。

例えば、電車で毎朝見掛ける彼。

例えば、よく行くショップの可愛い店員さん。

例えば、職場の上司。

例えば、高校の後輩。

人の数だけ、喜びから生まれる笑顔があり、悲しみから生まれる涙

がある。

これは感情と呼ばれる、温かくも悲しい物を持つ者の、ほんの一部を紹介する物語。

001 古河智の物語

大学生も四回生になると、自由な時間が多くなる。

就職も既に内定が決まっており、最低限必要な単位も習得は終わった。

時間に余裕が出来た今、一番精が出るのはアルバイト。

それも今日は突然休みになったため、俺はとにかく暇を持て余している。

「あら智、今日はバイトじゃないの」

リビングのソファで何をするでもなく、ただ意味もなくテレビの音声聞き流しながらぼーっとしていた俺に声を掛けたのは、買い物から帰った母だった。

俺は簡潔に休みになったという旨だけ伝え、携帯を開く。

その行為に意味など無かったが、ただ手持ち無沙汰を感じていた。

「そうそう、この間、恵ちゃんに会ったわよ」

母はそう言いながら、いつの間に準備したのか、二人分の紅茶をテーブルに並べ、ソファに腰を下ろした。

母が大量の砂糖を紅茶に入れるのを横目で見ながら、突然出てきた懐かしい名前に胸が熱くなるのを感じた。

石川恵。

小学生の頃に知り合い、中学、高校と共に通った幼馴染み。そして……俺が今までに付き合った唯一無二の女性だった。

「おはよう、智っ！」

毎朝明るい笑顔で家まで迎えに来る恵。

彼女から告白されて付き合い始めたのは、中学二年になる春のことだった。

緊張気味に、それでも真っ直ぐな瞳で俺を見つめながら言った、「彼女にしてください」と言う言葉が、今でも鮮明に蘇る。

普段の明るさ、気の強さからは想像も出来ないような緊張した表情、そして微かに震える声、そんな恵を見て、俺は返事をする前に抱き締めていた。

デートらしいデートはほとんどしたことが無かった。

毎日の登下校、休日はどちらかの家でゲームをしたりパソコンを触ったり……。

二人で何かをすることは少なかったが、同じ時間と空間を共有しているだけで満足だった。

それは恵にとっても同じようで、文句を言うことも機嫌を悪くすることも、只の一度も無かった。

高校生になりクラスが離れても、登下校はずっと一緒に、昼休みには二人で屋上で弁当を食べたりもした。

初めは新しい友人達に冷やかされたりもしたが、俺達にとっては当たり前で、一番居心地の良い時間であった。

この頃には、初体験も済ませていた。

お互いに初めての恋人で緊張や不安もあった。

それでも初めて一つになった瞬間は感動したし、恵が涙目で「嬉しい」と呟いているのを見てとにかく愛しく感じた。

高校を卒業し、俺達は別々の進路を歩むことになる。

俺は県外の大学へ、恵は地元で就職することになった。

この時の俺達には、離れる不安なんて無かった。

それでも、別れは想像以上に早く訪れた。

「智の気持ちがわからない」

卒業後、当たり前に出会えない日々が続いていた。

夏休みが目前だったにも関わらず、俺達はお互いデートの計画も立てずに居た。

その結果なのだろうか、恵は限界を感じたようで、別れたいと言う旨のメールを送って来た。

新しい土地での大学生活も忙しく、俺も余裕がなかったため、了承の返事を返したとき俺達は連絡を取り合わなくなった。

少しずつ生活に慣れてきた頃、俺は一気に後悔した。

今ならまだ間に合うかも知れないと思い連絡を取ろうとしたが、アドレスも番号も既に変わっていた。

それでもいつか、最後には戻って来てくれるかも知れない……。

あれから四年近くも経っているのに、未だにその期待を捨て切れずに居た。

「恵……元気そうだった？」

俺は冷静を装って母に問い掛けた。

心の中では会いたい、声が聞きたい、また昔のように笑いかけてほしい、そんな気持ちでいっぱいだった。

四年しか経っていないけれど、恵は変わったかな、変わっていないければ良いな……。

そんな期待と不安は、脆くもすぐに崩れ去った。

「元気そうだったわよ、可愛い赤ちゃん抱いて……恵ちゃん、結婚してたのね。知らなかったわ」

嬉しそうに話す母とは裏腹に、俺は言い表しようのない喪失感に襲われた。

そんな気持ちを悟られないように短く「そうか」とだけ答え、飲み終わった紅茶のカップをシンクへ置き、そのまま部屋へ戻った。

結婚……そうか、子どもも産まれたのか……。

ベッドに座った俺の太股に一滴の水滴が落ちたとき、漸く自分が涙を流していることに気が付いた。

恵から別れたいと言われてから一度も流すことの無かった涙が、次から次へと溢れ出てきた。

四年という時間は、二人の関係を修復させるには剩りにも長過ぎたようだ。

戻りたいと思って居た場所は、もう姿を変えてしまっていた。

「幸せにしてもらえよ」

静かな部屋に、精一杯の饒の言葉が小さく響き、漸く俺の長い初恋が、終わりを告げた。

002 相沢怜の物語

「怜、最近機嫌良いよね」

仲の良いクラスメイトに突然そんな言葉を掛けられた。

「そんなことないよ」なんて言いながらも満面の笑顔の私。
自覚がないわけではなく、まだ詳しい話を友人にしたくないだけなのだ。

私は最近アルバイトを始めた。

大学生活に慣れ時間に余裕が出来たため、少しでも親の負担を減らしたいと思い、始めたアルバイト。

それが今では無くてはならない大切な場所になっている。

バイト先は某有名ファーストフード店。

明るいことだけが取り柄の私には接客業は天職なのではないかと感じている。

「おはようございます!」

いつものように制服に着替え、笑顔でオーナーに挨拶をする。

「怜ちゃんは今日も元気だな」

オーナーも笑顔で返事をしてくれる。

私はこのバイト先が大好きで、このみんなも大好き。
アットホームで笑顔に溢れている、それでも仕事には熱心に取り込む姿勢のみんなを尊敬もしている。

「おはよう、怜ちゃん」

「北山さん!おはようございます!」

何より私がこのバイトを楽しんで続けている最大の理由で、ここ最近上機嫌な理由が、彼、北山さんの存在だ。

北山さんは私より二ヶ月早くここでアルバイトを始めたらしく、夜のみのシフトでほぼ毎日入っている。

27歳で現在は彼女は居ないと、バイト先の先輩から情報を得ている。

昼間は正社員で働いているらしく、何故バイトをしているのかまではわからなかった。

長身で爽やかな笑顔、わからないことがあれば優しく指導してくれる北山さんに惹かれるまでは、そう時間はかからなかった。

私も学生のバイトなので夜のシフトが多く、度々北山さんと同じ時間に働く機会があった。

「怜ちゃん、今日本当に行くのか?」

「もちろん!」

ここ最近毎日北山さんをご飯に誘っていて、最初は断られ続けた。

けれど、根負けした北山さんと前回のバイトのときに「週末のバイト後にご飯くらいなら……」と、とうとう約束を取り付けた。

そして、今日こそがその週末!

苦笑いの北山さんの隣からオーナーが「あんまり困らせるなよ」なんて言っているけれど、聞き流しちゃう。

短時間の食事だけだけど、やっと取り付けたデートなんだから!

いつもよりハイテンションでバイトに勤しむ私を少し嬉しそうな笑顔で見えていた北山さんの視線の意味には、私はまだ気付いていなかった。

そして、いつも通りにバイトは終わり、北山さんとそのまま食事に行くことになった。

「ごめんね、こんなお店で」

着いた場所は普通の居酒屋さんだった。

もちろん私はそんなこと気にしないので、笑顔で問題ないと伝えた。北山さんも少しほっとした顔になったところで店に入ることになった。

主にバイトの話や私の学校の話などをしながら楽しく時間は過ぎていった。

北山さんは聞き上手なので、ついいろんなことを話してしまった。私も聞きたいことがたくさんあったけれど、とにかく時間を共有しているという事実だけで満足だった。

程なくして私たちはお店を出ることにした。

もともと食事だけの約束だったし、私はこのまま帰ることを覚悟していた。

しかし、私のそんな考えを否定したのは北山さんのセリフだった。

「もうちょつと話そうか」

私には断る理由もなかったので、近くにあった公園で休みながら話すことにした。

北山さんはお酒も飲んでいたので、少し酔っていたようで、いつもより上機嫌だった。

普段見ることのないそんな一面を見ながら、私も少し悦に浸っていた。

店の中で話していたような話が続き、ふいに会話が途切れた。

北山さんに視線を移すと、薄く笑みを浮かべたように見えた。
次の瞬間、北山さんが私の思考を停止させた。

気が付くと北山さんの唇が私の唇を塞いでいた。
刹那とも言えるくらい短いキスだった。

私の唇を塞いでいた物が離れても、私は目をそらせないでいた。
北山さんも同じように私を見つめている。

そしてそのまま一言声を放った。

「怜ちゃんのこと、好きになったかも」

こうして私達は晴れて恋人同士になった。

翌日からますます元気に毎日を過ごすようになった。

大学の友人に彼氏が出来たと報告し、また紹介するね、なんて女子
大生らしい会話を弾ませることが出来た。
バイト先のみんなには伝えずに居た。

今までと変わらずに仕事をこなし、たまに食事に行ったりしながら
楽しい毎日を過ごしていた。

ある日いつものようにバイト後に二人で食事に行き、そのときに北
山さんから「たまには泊まりで遊ぼうか」と提案を受け、近くでは
あるけれど、ホテルを予約して一泊で遊びに行くことになった。

このデートのときに私と北山さんは初めて一つになった。

もちろん初体験ではなかったけれど、出会ったときから憧れを抱い
ていた北山さんとの経験は、私にとって大切な思い出になった。

そのデートから程なくして、北山さんはバイトをやめることになっ
た。

もともと短期間のみのバイト契約だったようで、北山さんの送別会
の後、北山さんの居ないバイト生活が始まった。

バイト先の先輩に「寂しそうだね」なんて言われながらも、心の中では私達は付き合っているのだから、いつでも会える、なんて気持ちで居た。

しかし現実は一層厳しく、北山さんはなかなか都合を付けられないよう
で会えない日々が続いた。

それどころか、連絡を取ろうと思ってもメールが返ってくることで自
体が少なくなっていた。

さすがに寂しく感じてきた頃、バイト先の先輩が私に驚愕の事実を
教えてくれた。

北山さんは、奥さんがいること。

子どもが産まれるから、その費用に余裕を持たせるためのバイトだ
ったこと。

私は驚き、目の前が真っ暗になったように感じた。

しかし、北山さん本人から聞いたわけではなかったもので、どうして
も信じる事が出来なかった。

それでも、具体的すぎるその話は、私と北山さんの関係を壊すには
十分すぎるものだった。

翌日私は悩まず北山さんにメールを送った。

「結婚してるって、本当ですか？」

本当は電話を掛けようかとも思ってたけれど、出てくれないような気
がしたこと……なにより声を聞いて話を出来る自信がなかった。

メールは日をまたいで返ってきた。

「知ってると思ってた」

間違いようのない肯定の返事で、これ以上メールを返すことが出来

なかった。

私は返信もしないままアドレスを変更した。

私は不倫相手だった。

奥さんは妊娠していたんだ。

結婚していることを私が知っていると本当に思っていたのかはわからなかった。

それでも、私の恋愛が終わったことだけはわかった。

「もう浮気しちゃだめだよ」

涙声に滲んだ私の言葉が、二人を結んだ公園に小さく響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0337z/>

明と暗の物語～失恋短編集～

2011年12月1日17時50分発行